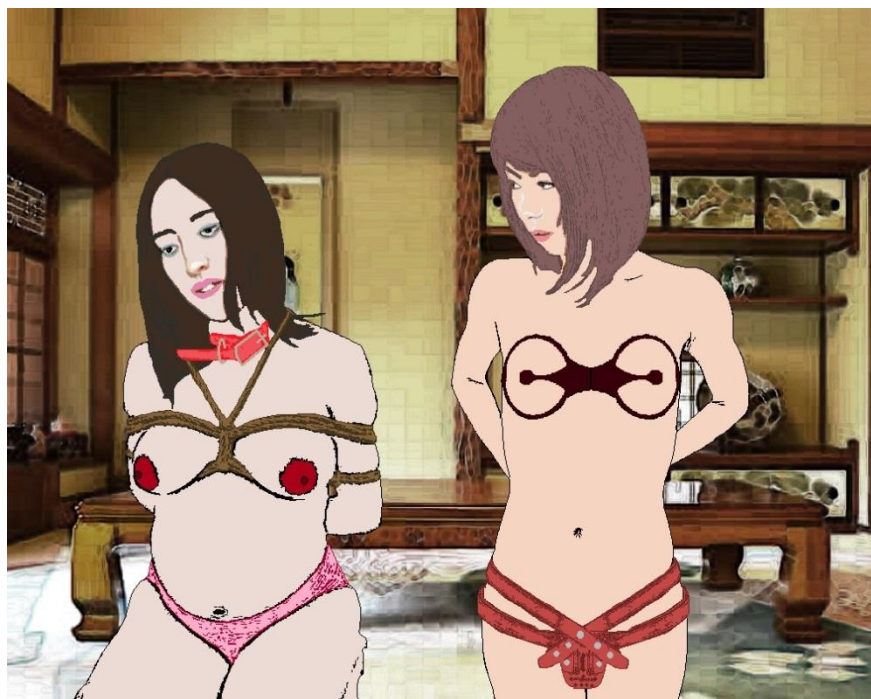


姪奴と甥奴（後編）

繁殖奴隷にされる姉と
男の娘に改造される弟



濠門長恭

目次

登場人物	- 3 -
前編の粗筋	- 4 -
7 . 男の娘プログラム	- 5 -
8 . アクメ開発	- 32 -
9 . 白黒ショー	- 52 -
10 . 長引く入院	- 91 -
11 . 偽りのカミングアウト	- 107 -
12 . 煉獄の日々	- 151 -
13 . リンチと虐め	- 161 -
14 . 淫虐の血脈	- 185 -
15 . 悦虐バカンス	- 193 -
16 . 苛辱の典	- 216 -
後書き	- 224 -

登場人物

近藤悠莉愛

1年生

ノーマルな性的指向の持ち主（と、自分では思っている）。

ぎりぎりCカップ。

今年の夏にナンパされて、経験人数1。

近藤尋海（広美）

悠莉愛と3歳違いの弟。姉が初体験したと同じ頃、精通を経験。

未発毛。Hな事柄には興味津々。M性向有り？

近藤華枝

在学中に妊娠が発覚して中退。両親の強制で、別の男と結婚させられて悠莉愛を産む。尋海は、その男とのあいだの子供。

出城勇介

華枝の兄。建設会社社長。引退した両親は海外で余生を楽しんでいる。勇介の性癖に愛想を尽かした妻は、東京の進学校に行ったひとり息子の世話を口実に東京で暮らしている。事実上の離婚状態。

前田真帆

高給で釣られて住み込みの「猥婦」をしている。マゾっ気は強いが、年下に対しては（男女を問わず）サディスチンの一面も。

津村和臣

悠莉愛と尋海を調教するために、SMサークルの紹介で雇われた。ドSのバイセクシャルだが、とくに少年を好む。過去にはウリの経験も有り。

前編の粗筋

シングルマザーの近藤華枝が覚醒剤と売春斡旋の容疑で逮捕されて、悠莉愛と尋美は伯父（地方建設業界のボス）である出城勇介の世話を受けることになった。

東京の学校に通う息子の世話と称して妻が別居しているのをさいわい、勇介は高給で釣った前田真帆を「猥婦」として牝奴隷同然に扱っている。そこへ舞い込んできた少年と少女を、勇介は「姪奴」「甥奴」として調教する。厭なら出て行け。そのときは妹（華枝）とも縁を切って、私選弁護人も解雇する。そうなれば、おまえたちの母親は実刑判決を受けるだろう――と脅して。

姉弟は脅しに屈して、勇介の調教を受け容れるのだった。

7. 男の娘プログラム

「どうにも、その金玉は見苦しいな。和臣くん、なんとかならんか」

朝食の場で開脚正座している尋海の股間をフォークの先で示して、勇介が茶番劇の幕を開けた。

「できなくはないですよ。ヒロ、そこに立て」

気軽に請け合って。和臣は広美のT字帯はずした。背後から抱きすくめて淫囊をまさぐり、鼠蹊部を指でぐりぐり押して。

「もっと脚を開いて……ここか。ちょっと痛いぞ」

ぐっと睾丸を押し上げる。

「つつ……」

もう一方の睾丸も同じように押し上げて。和臣が手をどけると、寒さで縮こまっているにしても小さすぎる淫囊がそこにあった。

「さわってみろよ」

尋海が怪訝な顔で陰囊に触れて——ぎよつとして和臣を振り返った。

「ない……！？ 玉がなくなってる」

「腹の中にしまったのさ。ケンケンすれば元に戻るが、それは後だ」

和臣は尋海の萎えたペニスを後ろに引っ張って片手で押さえ、もう片方の手で皮だけになった淫囊を寄せてペニスを包んだ。

「はい、これ」

真帆から小さなチューブを受け取って、淫囊の合わせ目に液体を流し込む。

「一分ほど、自分で押さえてろ」

尋海の正面にしゃがんで、淫囊の合わせ目がまっすぐになるように微調整して、さらに少量の液体を塗布した。

「よし、もういいぞ」

尋海が手をはなしても——寄せ合せた淫囊はそのままの形状を保って、ペニスを完全に隠していた。和臣が塗ったのは瞬間接着剤だった。

「これは、いい。まるで小さな女の子の割れ目のようだ」

「え……？」

「見せてやるよ。こっちだ」

和臣に背中を押されて、尋海はダイニングから浴室へ移動した。

「ええっ……??」

姿見に映った自分のヌードを見て、尋海は息を呑んだ。勇介が言ったとおり、股間には縦に一本の筋があるきりで、小さな女の子の割れ目とまったく同じに見えた。

「タックという女装の技術だ。自分でもできるようになれよ」

それから、わざとらしく偽の女性器をためつつがめつして。

「これだと、今までの金属禪は似合わない。こっちにしよう」

和臣が、脱衣籠から別のT字帯を取り出した。いや、それはY字帯とでもいうべき形状をしていた。

アナルディルドのすぐ前から、ほとんど平行に尿道プラグが突き出ている、そこから先の帯はV字形に別れている。

淫嚢を貼り合せて形成した疑似女性器は、下端を接着していない。尋海を四つん這いにして、その隙間から尿道プラグを差し込み、片手で尋海の股間を押さえてペニスを固定して、尿道プラグを挿入しようとした。

「痛い……いつもより、ずっと痛いです」

「手探りだからな。痛くなくなるように腰を動かしてみろ」

無理な注文だったが、尋海は息を詰めて腰の角度を微妙に変えてみる。

「お……」

うまく角度が一致したらしく、するっと尿道プラグが股間に吸い込まれた。

尿道プラグを支点にしてアナルディルドの位置を合わせて、こちらは簡単に挿入できた。

二本に割れた金属ベルトを鼠蹊部に沿って引き上げて留める。このY字帯は前の二箇所

でロックする構造になっていた。

こんな物があらかじめ準備されているということは、最初から尋海を男の娘に仕立てるつもりだったわけだが、尋海はそこまで気づかなかった。

アナルディルドを十五秒間締め付けさせてから、和臣がY字帯をロックした。

「あのう……」

尋海が羞ずかしさと心細さを縋い交ぜにした顔で勇介を見上げた。

「これ、前がもろに見えてます」

「竿も玉も隠れているんだ。羞ずかしいことはないだろ？」

押しかぶせるように言われては、それ以上は文句を言えない。

「……はい。これでいいです」

ダイニングへ連れ戻されて。

「おお、これはいい。すっかり女の子だ。よし、今日からお前はヒロでなくロミと呼ぼう」

これからは女言葉を使え。女っぽい仕種を

真帆に教えてもらえ。

と、ここまでは諦めた顔で勇介の言葉を聞いていた悠莉愛だったが。

「一本筋だけでは、つまらんな。胸を膨らませて尻ももっと丸く——女性ホルモンを投与してやろう」

「やめてください！」

たまりかねて叫んだ。

「そんなことしたら尋海は、尋海は……まともな男性として成長できなくなります！」

「なに、大丈夫だ」

勇介は軽く受け流した。

「男は女と違って、成長期が長い。一年や二年寄り道したところで、すぐに取り戻せる」

「嘘です。弟の一生を台無しにするくらいなら、母は喜んで刑務所へ行くでしょう。もう、伯父様の変態趣味につきあうつもりはないです。ここを出て行きます！」

ガタン！

椅子を蹴立てて勇介が立ちあがった。悠莉

愛に詰め寄って、防御の暇を与えず腹にパンチを突き入れた。

「ぐっ……！」

身体を丸めて苦悶する悠莉愛の腕をねじ上げて、後ろ手に緊縛する。

「女を理屈で説得しようとしたのが間違いだったな。たっぷりと身体に言い聞かせてやる」

悠莉愛は苦痛に呻きながら、それ以上は抗おうとしなかった。どころか。

「お赦してください。つい、マゾ牝奴隷の立場を忘れて、伯父様に逆らってしまいました。ヒロ……ロミを女の子にすると伯父様がおっしゃるのなら、ユリは反対しません。いえ、反対する権利なんか、ないです」

どうせ最終的には屈服させられるのなら、拷問されるだけ損だ。それよりも。表面は従順に振る舞って、なんとかして出し抜いてやろう。悠莉愛はこれまでずっと、そんな考えを抱いてきた。

なんとかして出し抜いて、母も弟も自分も

平穩な生活を取り戻したい。それは絶望的な願いのように思えたが――母を犠牲にすると決心してしまえば、道は残されている（かもしれない）。

「よかろう。身体への説得はやめておこう」
ほっとしたところへ追い討ちが来る。

「しかし、儂に逆らい、儂を罵った罰は受けねばならんな」

「ああ……」

悠莉愛はその場に崩折れかけて、縄に引き止められた。

「反省しておるようだから、お前に罰を選ばせてやろう。どんな極刑がふさわしいと思うのだ？」

極刑といえば、三角木馬とワイヤー鞭しか知らない。その両方をみずから望めば、すこしは勇介の目を欺けるだろうか。

「伯父様！ ユリをゆるしてあげてください。ぼく、いえロミは頑張って女の子になります。いえ、なりたいです。学校でも、女の子みた

いだとからかわれることもあったんです。それくらいなら、女の子になっちゃったほうが、ロミも嬉しいです」

尋海は勇介の足元に土下座して、必死に訴えた。

尋海の理解では、極刑とはワイヤー鞭の百敲きだ。初日にほんの数発受ただけで（男性に固有の部位だったという事情はあるが）悶絶してしまった。

ワイヤー鞭で二十発くらいを手加減して（と、勇介は言っていた）叩かれて、明け方になって部屋へ担ぎ込まれた姉の姿も、鮮明に覚えている。背中も尻も乳房も、皮下脂肪まで切り裂かれて血まみれだった。その五倍なんて、とても考えられない。

とって。姉の極刑の半分を自分の身に引き受けるのは――死刑囚が一人から二人に増えるだけのように思った。

尋海としては、勇介に迎合して積極的に女体化を望むくらいしか、嘆願の方法が思い浮

かばないのだった。

「考え違いをするな」

勇介が苦笑を作った。

「お前を女の子にはせんさ。オトコノコ、漢字で書けばオトコノムスメか。若者のあいだで流行ってるらしいな。生物学的には男性のまま、外見は女そのもの。そういう生き物にしてやる」

「ありがとうございます」

礼を述べたのは、悠莉愛のほうだった。生物学的には男性なら——成長期にあるうちに女性ホルモンの投与を中止すれば、元の姿に戻れる。そんなふうには、悠莉愛は安心したのだった。母の執行猶予が満了して、この屋敷に閉じ込められている理由がなくなって、親子三人の生活を取り戻してからでも、ぎりぎり間に合う。

それまでに自分たちが完璧に馴致され、尋海への女性ホルモン投与も続けられるという——そんな恐ろしい未来もちらっと頭に浮か

んだが、敢えて無視した。マゾ牝奴隷のユリに成り下がらず、近藤悠莉愛としての自我を最後まで保ち続けなければいいのだ。

「よかろう。姉弟愛のうるわしさに免じて、ユリへの極刑は特別に赦してやる。しかし、言っておくが。特例はこれが最後だぞ」

「はい、もう絶対に逆りません」

後ろ手に緊縛されたまま、悠莉愛は上体を廊下に投げ出して土下座するのだった。

その日のうちに、尋海の『男の娘化』は容赦なく開始された。

初日は、真帆による歩き方の特訓。男はつま先を外側に向けて左右の足を別々の直線状に乗せて歩くが、女はすべてが逆になる。つま先はそろえるか軽く内向きで、身体の真下に引かれた一直線上に左右の足を乗せる。

足を蹴り出して歩くのではなく、腰を左右交互に振り出して、脚はそれを追いかける。常に足をきちんと上げるように心がける。大

股に歩くのは論外だが、歩幅が小さすぎてもいけない。手を大きく振るのもまったく振らないのも美しくない。前へ振るのではなく後ろへ振るように気を配る。

説明を聞いただけで足がもつれてしまいそうだが。一直線上を歩くのだけは、自然とそうなった。股間の障害物がなくなったぶん、内腿を摺り合わせて歩くようになる。

しかし、腰を先に振り出すというのは、イメージからしてよくわからない。ヒップをくねらせるのとは根本的に違うと言われては、もう、なにがなんだか——頭が混乱する。

特訓の二日目の朝。

「今日はマホに付き添ってもらって、美容院と病院へ行け」

ユニセックスなボブカットだから、アレンジによっては女っぽくなるだろう。女性ホルモンを処方してもらうには、本人が行かなければならない。

「どちらでも名前を書くことになるが、今の字面はごつ過ぎる。これからは、まだれの広に美しいと書け」

迎えの社用車で勇介が出勤すると、真帆は外出の準備にとりかかった。タックは、和臣が起きてすぐに済ませているから、あとは外観だけだった。

「御主人様の指示はなかったから、今日のところはあたしの趣味でいくわよ」

着せられたのは、丈の極端に短いホットパンツとタクトップだった。ホットパンツはたぶんレディースで、それもネット通販でしか売っていないだろう。きっちり穿いてもヒップの上半分が露出するし、股割りも極端なハイレグだった。タックをせずに穿けば、確実にモロ出しになる。そしてタンクトップは、へそが見える丈だった。

さいわいに足回りはスニーカーだったので、転ぶのだけは心配せずにすんだ。

女の子(男の娘)になると誓った広美だが、

さすがにこの格好は羞ずかしかった。露出過剰だし、冬の服装ではない。

しかし広美の仏頂面は、真帆の外出支度を見て、驚愕に変わった。素肌にセーターだけだった。ヒップは半分しか隠していないし、前は背の低い子供の目線なら、股間まで見えてしまうだろう。そして編み目が粗いので、肌が透けて見えるどころか、乳首が飛びだしてしまいそうだった。

どう見ても痴女そのもの。

「だいじょうぶ。通報されたこともあるけど、その場で注意されただけで、おとがめ無しだったわ」

涼しい顔で、そんなことを言う真帆。

もっとも。悠莉愛のように、その姿でバスに乗るのではなかった。裏口から出て屋敷から百メートルほど歩くと、タクシーが待っていた。

「なんだ……」

口に出してつぶやいたのを、真帆に聞くと

がめられた。

「あら。そんな艶姿を人目に晒して歩きたかったの？」

「ち、違います！」

即座に否定はしたものの。大勢の人に見られたら、どんなに羞ずかしいだろうと思うと、封印されたペニスがタックの中で突っ張ってしまった。もっとも、きつく押しえられているからせいぜい半勃起程度に留まって——そのぶん、もっと奥のほうがいんと熱く痺れた感じになった。

タクシーで美容院に乗りつけて。中にはいるなり、全員の視線が集中した。客は女性ばかり。突き刺すような軽蔑しきったような冷たい目つきだった。スタッフの中に男性が三人いたが、こちらは平然を装っている。

視線の九割以上は、真帆に向けられている。広美を見る者もいたが、すぐに目をそらす。痴女に引きずり回されている性別不明の幼い犠牲者——とでも思われたのかもしれない。

事実、そうなのだけれど。

二人はいちばん奥の椅子に案内されて、広美が座らないうちから間仕切りカーテンが閉められた。広美は床屋とはすいぶん違う雰囲気呑まれて、これがふつうの対応なのか、ていよく隔離されたのか、そんな疑問を考えつくところではない。

「どうされますか？」

店長らしい年配の男性（といっても、広美には和臣よりすこし歳を食っているだけのように見えたのだが）が、広美と真帆の間あたりで声を向けた。

「このまま伸ばさせるから、カットは最小限で、なるだけフェミニンに仕上げてください」

「でしたら、こんな感じでは？」

スタイルブックを広げる店長。

「こっちのほうが可愛いんじゃない？」

「華奢に見えて、顎の線がマニッシュですから、バランスが悪いかと」

広美を蚊帳の外に置いて、相談がまとまっ

て。その場でシャンプー。は、若い女性が受け持った。広美がシャンプー台に身を乗り出すと、肌にぴっちり貼り付いたタンクトップの胸元を覗き込んで、それからホットパンツの裾に目をやって、怪訝な表情になる。広美が男か女か判じかねているらしかったが、じきに。

「……………」

声には出さなかったが、わずかに露出しているY字帯に気づいたらしい。そして、納得した表情になった。なにかしらの器具でペニスを押さえているとでも判断したのだろう。

カットは店長みずからが担当した。櫛で髪を梳きながら、髪の内側にすこしだけ鋏を入れて、毛先を整える。散髪に比べて、ずっと手間をかけるくせに切られる髪量は少ない。カットが終わって、またシャンプーして、トリートメントですすいで、ブローして。ブラシを掛けて。

「うわあ……」

鏡に映る自分の顔を見て、広美は驚きの声を漏らした。基本的には同じボブカットなのに。ずっと丸っこい感じになって、顔の輪郭を強調しているのかぼかしているのか。美少女とはいえないにしても、可愛らしい少女が鏡の中にいた。

好奇と軽蔑の眼差しに見送られて美容院を出ると、来たときとは別のタクシーが待っていた。街中を突っ切って、繁華街にしては落ち着いた雰囲気だが住宅街ではない。そんなロケーションに、次の目的地があった。

背の低い雑居ビルの二階。『下垣内クリニック』とだけ書かれたドア。

その受付で、広美は初めて自分の新しい名前を書いた。そして。渡された問診票をみて首をかしげた。選択肢になっている設問には、あらかじめチェックがはいっていた。

・自分の性別をどう考えていますか？

男性 女性 わからない

・現在の生活に満足していますか？

はい いいえ わからない

ずっと見ていくと、踏み込んだ内容も多い。

・どんな治療を望みますか？

診断書のみ ホルモン療法

乳房造形 脂肪吸引（ウエスト）

ヒップ造形 性器手術

ぞくっと、心の奥が粟立った。

「記入欄には自分の手で掻くのよ」

真帆にうながされて、広美はボールペンを握った。最初の記述欄を真帆が指でなぞった。

・性別の違和感に気づいたのはいつごろですか？ そのきっかけは何でしたか？

「中学生になって精通があったとき」

耳元でささやかれて。広美は、そのとおりに書いた。

・小学生の頃は、どんなことで悩みましたか？

「女子が可愛い服をきているのが羨ましかった。母まで僕のことを女顔だと言うくせに、ユニセックスな服は絶対に買ってくれなかった」

そんな調子で一時間もかけて問診票を埋め
てから、採血。最後に医師とのカウンセリン
グーは、三十秒で終わった。

「とりあえず処方箋を出しておきます。量は
少なめにしておいて、血液検査の結果がわか
ってから調整しましょう」

ジェンダークリニックが初診で処方箋を出
すなど異例なのだが。インフルエンザでも腹
痛でも、その場で薬をもらうのだから、広美
は疑問に思わなかった。しかし、薬局で受け
取った薬の種類が多いのには驚いた。

女性ホルモンが二種類と、抗男性ホルモン
剤。これは標準的な処方だと、真帆が説明し
てくれた。体内の男性ホルモンを急激に減ら
して、卵胞ホルモンと黄体ホルモンで身体を
女性化させる。

しかし広美には、男性の機能を維持させる。
睾丸を体内に長時間入れていると、体温で精
子の機能が衰える。おたふく風邪で無精子症
になるのと同じだ。それを防ぐために、体温

をすこし下げる。さらに、精子の機能を活発にする亜鉛サプリも服用するのだと言われて。
（それって、アクセルとブレーキを同時に踏むようなものじゃないのかな？）

広美は不安になった。けれど。男性機能を失うのは、もっと怖かった。美少女に変身してみたいとは思わないでもないが、将来オバチャンにはなりたくない。和臣さんみたいな逞しい青年になって、伯父様（は、やだな。パパの顔は覚えてないし……とにかく）カッコいいオトナになりたい——というのが、正直な気持だった。もっとも、和臣あたりを比較に思い浮かべるところが、すでに牝の感性に傾き、マゾに目覚めている証拠なのだが。

タックは、朝の排泄後から夜の排泄前まで——と、定められた。昼の排泄は、タックのまま。会淫部にちかい部分はタックしていないから、その隙間から放尿できる。ただし、真帆や悠莉愛と違って、立小便は無理だった。

本物の女性が立小便をして、偽物の少女がしゃがむというのは、奇妙でもあり滑稽でもあるのだが、それが勇介の趣味（というよりは調教の一環）なのだから、従うしかない。

広美の女体化促進は、薬剤だけにとどまらなかった。三日目からは、勇介の言葉によれば『おっぱい養成ギプス』を装着させられた。輪郭だけのブラジャーとでもいうか。乳房の基底部を丸い輪になった電極で囲んで、電磁波で刺激する。両側から突き出た腕の先端に付いた小さなカップを乳首にかぶせて、こちらは振動で刺激する。十五分の作動と四十五分の休止を繰り返すように設定されていた。

『おっぱい養成ギプス』が作動しているあいだは、真帆の特訓も学校の勉強も、乳首がくすぐったくて手につかない。

ベッドに拘束されているあいだは、これは和臣の言い方だが、男性回復タイムだった。ただし、最初に言い渡された射精禁止は続いていた。いや、強化された。ペニスの根元と

カリクビのすぐ下に、リングを装着された。リングに等間隔で植えられているボルトが緩く締めつけて固定されているだけなのだが。ボルトの先端は鋭角に尖っているので、勃起すると鋭い痛みを与える。つまり、鬱血の心配なくベニスを狭窄して、夢精すら封じてしまう器具だった。

最初のうちは夜中に激痛で目を覚まして睡眠不足に陥っていたが、女性ホルモンの効果も手伝って睡眠中の勃起回数も減り、硬度も落ちて――朝まで熟睡できるようになるまで、一週間とかからなかった。

広美が『男の娘特訓』を受けている日々、悠莉愛はソープテクニックと四十八手の習得を強制されていた。ソープテクニックは真帆の手ほどきを受けていたが、四十八手は相手が和臣だった。生挿入ではなくゴム着用だから、勇介の考えでは疑似SEXにすぎない。

ピルは許されなかったから、勇介は本気で

姪を孕ませるつもりらしい。

悠莉愛も広美も、もはや懲罰とか躰の口実すら用意されずに、ほとんど毎晩、土蔵に連れ込まれていたが、ワイヤー鞭や錘付三角木馬ほど苛酷な調教はなかった。

一時間程度の海老責めとか、せいぜい三十分の駿河間（手足をまとめて逆海老に括って吊るす）のような拘束系が主体だった。時間は短めだが、それだけでもじゅうぶん以上に苦しい責めだった。週に一度は、性感開発と称して、アクメ・エアロバイクやお立ち台にも乗せられていた。

午前中には家事労働、午後は『習い事』、長時間の入浴奉仕と、締めくくりの土蔵。学校の勉強をする時間は、ほとんど取れなかった。

それでも期末テストは、それぞれの学校から問題用紙が取り寄せられた。そんなことができるほど、勇介の人脈は太く裏社会での顔は広い。もちろん、テストの成績は惨憺たるものだった。

悠莉愛が最初に百敲きを受けたときに使われた鞭——バラ鞭と称しているが、実際には凶悪な九尾鞭そのもの——で、平均点に足りない点数だけ（力一杯ではなかったが）本気で叩かれた。悠莉愛は八十発、広美にいたっては百三十発。ふたりとも傷だらけの血まみれになって、中村医師の往診を仰がねばならなかった。

傷が目立たない程度まで回復するとすぐに、広美は真帆に連れられて、スマイル・ビューティクリニックへも行かされた。女性ホルモンの影響で淫毛の発育が促進されて、毛抜では追いつかなくなったのだ。

そのときはホットパンツとヘソ出しタンクトップではなく、テニスウェアを着せられた。まるっきりの夏仕様。ノースリーブでスコートはひらひらのギャザー。股下は五センチあるけれど、風が吹くか、そうでなくても大腿に歩くと危ない。

「ショーツは見えないから平気でしょ？」

と、真帆にからかわれても、広美は顔を赤くしてうつむくばかり。テニスウェアの下はY字帯だけなのだから、ショーツもアンスコも見えるはずがないのだ。

それ以上にこたえたのが、冬の寒さだった。似たような服装でも、美容院へ行ったときには、そんなに寒いとは感じなかったのに。

一般論になるが、マゾだからといって、苦痛に鈍感なのではない。被虐という日常から隔絶した場では、苦痛が快感というよりは悦虐にすり替わってしまう。それと同じで、変態的行為と自認している露出では、寒さが寒さでなくなる。

それなのに今は寒くて震えが止まらないのは、体温低下剤のせいだった。いわゆる冷え症の全身版だ。

体温低下剤の影響は、体感温度にとどまらない。日常の動作ものろくなり、筋力も衰えてしまう。だから、雑木林から飛んでくる枯葉もずっとすくなくなったというのに、裏庭

の掃除には以前より時間がかかるようになった。寒さに鳥肌を立てて震えながら、それでも風邪を引かないのは——日常生活までが被虐の場だと、広美が考えているせいかもしれないなかった。

脱毛そのものは、悠莉愛のときより短時間で終わった。まだ淫毛が薄いので、レーザー光の吸収が少なく、加熱量も小さい。その分、何回も通わなければならないのだが。

脱毛は短時間で苦痛も小さく終わったが。Y字帯を取って、タックまで剥して——勃起を弄ばれる恥辱には耐えなければならなかった。弄ばれてもいっそう硬くしたのだから、はたして恥辱と言い切れたかどうか、怪しいのだが。

そのようにして、姉弟が屋敷に囚われて一か月が過ぎていった。

8. アクメ開発

もうじきクリスマスという頃になって。

「いつまで経っても、お前は気をやらんな」

エアマットの上で泡まみれになって懸命に腰を振っている悠莉愛の乳房を両手で握りつぶして、勇介がつまらなさそうに言った。

「くうう……だって、伯父様がそんなことをなさる……痛い！」

九十度ちかくも乳房をねじられて、悠莉愛が悲鳴をあげる。

「言い訳はするな。本気で逝っておれば、なにをされても快感につながるものだ。とくにマゾはな」

勇介は腰に乗っている悠莉愛を払いのけて身体を起こした。

「よし、これから膣逝き特訓だ。明日の朝までには地獄と天国の両方を見せてやる」

「……はい、お願いします。ユリに地獄と天

国を見せてください」

悠莉愛は土下座して。顔が隠れたのをさいわい、表情は作らずに、この場で求められている台詞を棒読みした。

「それなら、ロミも並べて牝逝き特訓をさせましょうか」

広美にフェラチオのテクニックを教えていた和臣が、たった今思いついたような言い方をした。

「ちょうど一週間か。頃合いだな」

この一週間、広美は一度も射精を許されていなかった。タックをされている間は完全に勃起できないし、ペニスへの直接の刺激もない。寝るときは射精禁止リングで管理されている。そして肛門を犯されるときもリングを装着されて、トコロテン（後ろから突かれて前から出す）を封じられていた。この年頃の少年なら、勃起しなくても精子を漏らすか、さもなくば鼻血を吹きかねない。

姉弟は自分でシャワーの冷水を浴びて泡を

洗い流し、先に出て脱衣所で正座して調教を待った。

「メスイキって、お兄様は言ってらっしゃった。ユリみたいなすごい感じ方のことかしら？」

「わたしは、感じてなんかいない！」

浴室まで聞こえないよう声をひそめてはいたが、悠莉愛は本気で怒っていた。弟の言葉のなにもかもが癪に障った。

だいいちに、言葉づかい。強制されてのこととはいえ、すっかり女言葉——それも、男の前で使う『ぶりっ子』ぽい言い回し。

悠莉愛は弟とふたりきりのとき、そして内心では、勇介たちを呼び捨てにしているのに、広美は強制された二人称を本気で使っている。

そして、なによりも腹が立つのは。勇介に罵られて自分が本気で感じていると——広美に思われていると知ったことだった。

クリトリスを刺激されれば、快感が生じてしまうのは生理的反応だ。膣の中をこねくら

れたら、敏感なスポットを直撃されて声も出てしまう。そんなとき悠莉愛は、演技にはならない程度に、大袈裟な反応を心掛けている。それは勇介を満足させ油断させるためだった。口実すら作らずに性的虐待を加える男だが、機嫌が良ければ、すこしは手加減してくれると思う。

そして満足と油断とが積み重なっていけば――逃げ出すチャンスをつかめるかもしれない。勇介は警察まで抱き込んでいるらしいが、まさか警視総監までは手が届いていないに決まっている。というのは、風呂敷が広がり過ぎだけど。つまり、自分たちを取り囲んでいる檻には、どこかに境界線があるはずだ。境界線の外まで逃げれば、自分たちは安全で自由に平穏な生活を取り戻せる。

それなのに。このまま弟が飼い馴らされていけば――せっかくのチャンスが巡ってきたときに、自分ひとりで逃げなければならなくなるかもしれない。そして、自分はそこまで

非情になれないと、悠莉愛にはわかっていた。

だから、弟に本気で腹を立てたのだった。

しかし、そんな内心の思いは。浴室のドアが開くと同時に、心の奥底へ沈めて。土蔵へ連行される時の習慣に従って、素直に両手を後ろに回して縄を頂戴したのだった。

悠莉愛には勇介と真帆がつき、広美には和臣。ふたりのアクメ特訓が同時に開始された。

入浴の前にタックを剥していた広美は、ふたたび自分の手でペニスを完全に封印した。いつもどおりに残していた隙間からピンクローターを押し込んで、そこにも瞬間接着剤を流した。

四つん這いになった広美の背後から、和臣は自分のペニスではなく、奇妙な形をした器具を挿入した。和臣自身より細く短く、かく湾曲した内側には緩やかな凹凸がある。器具の端から直角に突き出た短い腕の先端は膨らんでいて、いっぱい挿入すると会淫部を

刺激する形状になっていた。男性のアナルオナニー専用器具だった。

和臣はそれをゆっくり抜き差ししながら、微妙にこねくって広美のピンポイントを探っている。

悠莉愛のほうは、ずっと大掛かりだった。

梯子を水平に寝かせたような拷問台に縦長のX字形に革ベルトで拘束されて、悠莉愛の尻が乗っている部分から下の横棧が取り外された。コンクリートブロックを二つ重ねたくらいの大きさの箱から突き出ている棒の先に取り付けられたディルドが、悠莉愛の牝穴に挿入された。箱は伸縮する脚を備えているから、高さも角度も自在に変えられる。

勇介がスイッチを入れると、ディルドがピスト運動を始めた。

ウィン、ウィン、ウィン……一定のリズムで一定の深さまで挿入されて、悠莉愛は無表情。これくらいの刺激では苦痛を感じないところまで馴らされてはいるが、快感を得るほ

どには開発されていない。

それは勇介も承知している。

「マホ、手伝ってやれ」

真帆が両手にコケシ形のハンドマッサージ器を握って、悠莉愛の横にひざまずいた。ハンドマッサージ器を垂直に立てて、乳首に軽く当てる。

ブブブブブブ……

ぴくっと、悠莉愛の身体が震えた。

「あああ……ん」

快感を誇張した喘ぎを漏らす悠莉愛。

しばらく悠莉愛の性感を搔き立てておいて。左手のハンドマッサージ器を乳房に滑らせ、右手はクリトリスを直撃。

「ひゃうんっ……んんん。ああっ……！」

悠莉愛の喘ぎ声が止まらなくなり、音程が上がっていく。演技ではない。ふつうなら羞ずかしくて押し殺す声を、意識して出しているだけだ。しかし、意識するところが醒めている証拠だった。

勇介がファックマシンに取りついて、ストロークと角度を少しずつ変えていく。

子宮口を直撃するほど深く。あるいは、ごく浅い所だけを短く。ストロークのたびに腹がぼこぼこ盛り上がるほど上向きにして。逆に直腸を圧迫するまで下向きにして。

悠莉愛の喘ぎ声も、それにつれて変わっていく。

「あ……」

「あ、ああっ……ん」

「くう……」

そこに、広美の鼻にかかった声が交じる。

「あ……そこ。なんか、変」

勇介が広美の男の娘化を急いだのは、声変わりの兆候を聞きつけたからだった。ボーイソプラノがかすかにしゃがれて、そこに女性ホルモンの影響で音質が柔らかくなって、独特の艶めかしい声に変わりつつあった。

「ここか？」

「もっと手前……でなくて、奥？」

ピンポイントを刺激されると快感があるのだが、それが正確にどこなのか、広美自身にもわかっていない。

「待て。自分で動くな。ちゃんと探り当ててやるから」

和臣が、いっそう小刻みに器具の位置をずらしながらこねくる。ピストン運動はせずに、アナルの奥の一点を掬い上げるような動かし方だった。

「あ……ひゃああん！」

広美の声が裏返った。四つん這いになった四肢を突っ張って、全身をぶるぶる震わせた。

「す、すご……こ……な……」

すごい。これ、なに？　と言っているつもりだろうが、言葉になっていない。四肢を突っ張って、無我夢中で括約筋を締めつけながら、射精とは違っていつまでも続く快感に震え続けている。

悠莉愛のほうは、意識した喘ぎ声を出していた。その気になれば、すぐに声を閉ざせる。

そう思っていたのだけれど。

またディルドの角度が変わって。膣の中間あたりを上向きに、ごく浅いストロークで突かれたとき。

「ああっ……あ？」

悠莉愛の声も裏返った。

「あっ、あっ、あっ……」

突かれるたびに喘ぎ声が押し出される。と同時に。クリトリスを刺激されたときの、さざ波のような明白な快感ではなく。大きなうねりのような、得体のしれない感覚が腰を包んだ。

大きなうねりは腰だけにとどまらず、全身に広がって、さらには周囲の空間へまでにじみ出していく。いや、身体が空間へ溶け込んでいく。もはや、大きなうねりというよりは――身体全体が爆発しているように感じられた。

もしも、この爆発を快感と呼ぶのなら。クリトリスや乳首への刺激で得ていた感覚は、

くすぐったさを強くした程度のものにしか過ぎない。

もちろん。ディルドで突かれているポイントをいきなり刺激されても、この爆発は起きなかつただろう。燃えにくい石炭の塊りにいきなり火を近づけるのではなく。まわりに積み上げた木材を燃やして、周囲から熱して新鮮な空気を吹き込んで、はじめて石炭は燃え始める。そして、ひとたび燃え始めると――まわりの燃料を取り除こうとすこしくらい水を掛けようと、火が消えることはない。

すでに真帆は、悠莉愛からはなれて見物にまわっていた。悠莉愛は膺の一点への刺激だけで、快感の爆発を続けている。

「ああああっ！ やだ、怖い！ 砕けちゃう！ 伯父様、もう赦して！」

恐怖を訴えて、身をもがく悠莉愛。しかし、ディルドの刺激がピンポイントからそれると、腰をくねらせて、ピンポイントを追いかける。

「怖い！ 砕ける！ くだけちゃううう！」

悠莉愛の全身が反りかえって、そのまま十秒ほども静止してから。不意にドサッと身体が台の上に落ちた。

「今日のところは、墮逝きの味を覚えさせるだけにしておこう」

勇介がファックマシンのスイッチを切った。

悠莉愛は荒い息を繰り返しながら、視線を宙にさまよわせている。

そして広美は。器具を尻に突っ込まれたまま、床に倒れていた。虚脱ではなく、快感の余韻でもなく、まだ快感の真ただ中であつた。その証拠に、器具がときおりピクピク震えている。

五分ほどもすると。爆発で飛び散った欠片を掻き集めて、悠莉愛が先に正気づいた。

「はああああ」

凄絶な快感を思い出して長々と息を吐いた。

勇介が真上から悠莉愛の顔を覗き込んだ。

「これが墮逝きというやつだ。女に生まれてよかったと思える瞬間だな」

「……はい」

複雑な思いで返事をする悠莉愛。これほどの、怖くなるような快感は膺への刺激以外では得られないと、それは実感している。けれど、その快感をもたらしたのは、もっとも憎み軽蔑し恐れている男だった。これから先、この快感に操られて、自分は本物のマゾ牝奴隷へと堕ちていくのではないか。そんな予感に心の底から怯えていた。

「では、第二ラウンドの開始だ」

勇介がしゃがんで、ファックマシンのスイッチに手を伸ばした。

「もう厭。あんな怖い思い、もうしたくない」

ウィン、ウィン、ウィン……ディルドがピストン運動を開始する。寸分変わらず、悠莉愛のピンポイントを攻撃する。

「ひゃああっ……厭あ！」

裏返った声で叫びながら、しかし悠莉愛は、腰の位置を変えようとはしなかった。

「あっ、あっ、ああっ……砕ける！ また

砕けちゃう……！」

まだ表層だけしか燃えていなかった石炭の塊りは、新たな空気を吹き込まれて、たちまちのうちに炎の塊りへと変じていった。

そして広美も。まだ快感から醒めないでいるうちに。器具を抜き取られて。和臣に腰を抱え上げられて。和臣の怒張に貫かれた。

器具の長さや形状とから、ペニスではこのあたりと見当をつけて、和臣が前立腺の裏側を巧妙に浅く連続して突っつく。

「あああっ……そこ！ もっと強く……すご……何度でも逝けちゃう。これが……女の人の感じ方なんだ！」

広美の言葉からは、自分を虐げている相手に快感を強制されている屈辱は、まったく聞き取れない。

広美は、そしてほとんどの男は。一瞬の閃光のような射精の快感しか知らない。いつまでも全身を浸している柔らかな快感は、まったく未知の体験だった。クリ逝きと膣逝きの

差異に愕然とした悠莉愛の比ではなかった。

「どうだ。男の娘になって、よかっただろう？」

「う、うん……」

「勇介伯父様に感謝しなくちゃな」

「はい……ロミを男の娘に生まれ変わらせてくれて、ありがとうございます」

「もう、ふつうの男に戻りたいなんて、思わないよな？」

「はい……ロミは、ずっと……男の娘でいたいです」

そのすべてがボイスレコーダーに記録されているとは知らず、広美は勇介の思惑どおりの言葉をうわごとのように繰り返すのだった。

広美の無理強いに言わされた願いは、すぐに叶えられた。

広美は真帆に伴なわれて三度目の外出をした。行き先は中村レディースクリニック。何度か往診に来てくれた医師の根城だ。

広美の服装は前と同じで、素肌にノースリ

ーブのテニスウェア。下着はY字帯。

「ウエストの脂肪吸引とヒップへの移植を同時に行ないますから、麻酔と鎮静剤を併用しましょう」

即席の血液検査とレントゲンと心電図を取られて、三十分後に全裸でタックしたまま手術台に横たわって。腕に点滴をされているうちにだんだん眠くなって、腰に別の注射をされたところまでは覚えていたが、そこで眠ってしまっ

た。目が覚めたときには、個室に寝かされていた。

「無理をすれば日帰りもできるけれど、一日入院して、体調を整えなさい」

言い残して、真帆は帰って行った。

脇腹が痛むので手を当ててみると、ガチガチにコルセットを巻かれていた。それでも、自分の記憶にある腰回りより細い感じだった。

うつ伏せに寝かされていたので寝返りを打ったら、尻が痛くなった。

(ああ、そうか……)

ウエストの脂肪をヒップに移植されたのだと、広美は思い出した。手術の傷痕が痛むというよりは、ヒップ全体が熱を持っている感じだった。

視界が揺れているような感覚が残っている。広美は目を閉じて、しばらくすると、また眠りに落ちていった。

夕方に起こされたときには、ヒップの痛みはずっと軽くなっていた。ベッドの角度を変えてもらって、上体を起こして食事をして。

個室にはテレビもあったが、なんとなく点ける気にならなかった。この一か月余り、テレビはまったく観ていない。部屋にテレビが無いのだから当然だが、あったとしても、そんな暇はなかった。裏庭掃除や雑用に追い回されて、男の娘特訓を受けさせられて、ちょっとだけ学校の勉強をして、浴室奉仕。日によっては土蔵での調教と折檻と躰と懲罰。懲罰だけは別格で過虐だけれど、ほかの三つが

どう違うのか、広美にはよくわからない。

(今頃、ユリは泡踊りをしてるのかな?)

広美の頭の中では、悠莉愛は姉ではなく自分と同格のマゾ牝奴隷のユリだった。そして自分は――やっぱりマゾ牝奴隷のロミ。

広美にとって、思い描ける未来はせいぜい進学までで、オトナになって社会に出るとか結婚とかは、SFと同じくらいに現在から隔絶していた。だから、男の娘でいることに、まったく不安は感じていない。いや。タックをしてアヌスを犯されるのが牝逝きの条件だと信じ込まされて――あの超絶凄絶悶絶な快感を得られるのなら、いつまでも男の娘のまままでいたいとさえ思う。

(あたしもユリみたいなボディになれるかな?)

すでに胸はわずかに膨らんできている。トップバストは、平均して一日に二ミリくらい性長している。一か月以内にAAAカップにはなる。

(Bカップまで二か月かあ)

真帆に教わったばかりのブラジャーのサイズを計算して、なんとなく溜め息をついた。

ウエストがくびれたのは、コルセットの上から確認している。ヒップに手を当ててみると、なんとなく厚ぼったい。

(あたしも泡踊りを教わりたいなあ)

悠莉愛が嫌悪と恥辱とを押し隠して強いられている行為を、広美は懂れてさえいた。もっとも、奉仕の相手は『伯父様』ではない。抱いてくれた回数が圧倒的に多くて、牝逝きも教えてくれて、ふとした拍子には甘やかしてさえくれる『和臣お兄様』と、思う存分いちやついてみたいのだった。

以前にはそれでも、男に抱かれることに抵抗はあったのだが、女性ホルモンを始めてからは、和臣の逞しい肉体が美しく見えてきた。男くさい臭いが匂いに変わってきた。

もっとも。女体――あけすけに言えば真帆への関心も薄れてはいない。これは、男性機

能を保存されていれば当然かもしれない。

ありていにいってしまえば。広美は男には抱かれないと思ひ、女には弄ばれたい（最後には征服したい）と願う、バイセクシャルに性長してきたのだった。